

ゆかし桐蔭かをる学園

芸術の力を知って

澤先輩が講演&コンサート

第2部では東京藝術大学の澤和樹学長が記念講演を行い、桐蔭での高校生活を振り返りながら、世界的に活躍する近況を語った。続いて開かれたバイオリンコンサートでは、至高の音色で会場の心を一つに包んだ。

講演ではバイオリンを始めたきっかけはイギリス民謡の『三匹の子豚』で、母親に弾きたいとせがんだところ、和歌山市本町の楽器店で購入してくれたとの懐かしいエピソードを綴り、その後の高校生活で、文化祭でスーパーマンに扮して活躍したことが、学長に就任した今も小学校1年生に扮装したり学園祭で踊ったりするなど「芸術の力を広げたい」との思いが込められている。また、PRに役立つため、近いうちにも「一度来ます」と話した。



4×100 分で日本新

中学女子陸上部が快挙

中学陸上部(田中雄顧問)は、8月21、24日に大阪市のヤマスタジアム長居で開かれた第46回全日本中学校陸上競技選手権大会の女子4×100リレーで優勝し、47秒04の中学日本新記録を樹立した快挙に、選手らは喜びに沸いた。

チームは6月の和歌山市大会に続き7月の県大会、8月上旬の近畿大会、全国大会と、4回連続で大会新記録を更新。目覚ましい成長の背景には4月の練習でバトンスのタイミングや一人ひとりのフォームの見直しをするなどの細やかな努力があった。

4人が力を入れたのは体幹の強化やバトンを受けるタイミングの調整。本番では練習の成果を発揮して後方を引き離



喜びに沸く参加メンバー

200人が和やかに乾杯

華やかな祝賀パーティー

式典後、祝賀パーティーが午後5時から和歌山市湊通1北のホテルアパローム紀の国で開かれた。約200人の同窓生ら約200人が杯を交わして親交を深めた。厳粛な中にも同窓生の絆が深まる温かい式典を終えた参加者らは和やかに歓談。在校生の活躍に目を細めながら、互いの近況を報告し合ったり、

小川敬文和桐蔭同窓会会長代行の「ひき続き地道に同窓会活動をしていきたいと思います。150周年の式典も盛大に成功させたい」とのあいさつで熱気あふやうな様子、閉会となった。



世界大会で存在を示す

缶サット班がイタリアへ

科学部缶サット班は、現地時間の6月24、28日にイタリア北部のローニャ市で開催された缶サット世界大会に出場。メンバー5人は、大舞台でも解説や質疑応答を英語で



堂々と行い、日本代表としての存在を示した。

缶サットとは空気の圧力を利用した人工衛星のこと。缶サットをロケットなどの飛行体に搭載して飛ばし、上空で放出させるパラシュートとともに落下させる。宇宙にこそ飛んで行かないが、センサーやマイコンを取り付け、上空でデータを取得し無事に回収するプロセスは、宇宙開発の中で必要とされる最も基本的な技術の一つである。

桐蔭のメンバーは、今世界大会への出場切符を2018年10月の缶サット甲子園全国大会で、8年ぶり2度目の全国優勝で手にした。

世界20カ国の参加の中、機体や落下装置、事前事後アレレーション中の課題やトラブルを、日本の技能と知識で乗り越えた。

メンバーは全員3年で山下匠君、瀧本英智君、佐山幸翼君、西岡右喬君、柴田玲君。

野球部ゆかりの助三郎さん

親類の出来助本店は創業400年



洋館に住みモダンで優しかった助三郎さん

1915年、第1回目の夏の甲子園大会から出場している野球部の歩みには、当時の野村造一校長、OBの出来助三郎の名が忘れ得ぬ人として挙がり、この度発刊された記念誌「写真に見る和・桐蔭の歴史」の9ページにも記されている。

当時監督を務めていた出来助三郎さんは同年、慶応大学の高浜選手を臨時コーチとして招くなどして戦力の強化を図り、20、21年の全国優勝へ導いた。

助三郎さんの生家は鉄砲鍛冶



助三郎さんの思い出を話す可也(かなり)さん

治(つづかじ)を営んでおり、現在、和歌山市東鍛冶屋町で創業400年を迎え、猟銃などを販売する(出来助本店(出来可也店主)は親類に当たる。

12代目の出来店主(67)によると助三郎さんは10代目良太郎さんのこと。出来店主は幼い頃、「助三郎」と慕い、眼光是鋭いが優しい助三郎さんのことをよく覚えていて、「一番の思い出は無類の野球」

その面見の良い人柄を受け継ぐ出来店主は現在、戦国時代最強といわれた雑賀孫市を顕彰する「孫市まつり」に鉄砲の管理者として協力し、和歌山市の振興に尽力。「城下町の伝統を継承しながら住みやすいまちになってほしいです」と願っている。

旧制中からの親交深める

桐蔭×大阪府立市岡 炎天下で熱い交流戦

桐蔭高校と大阪府立市岡高校の野球部は8月14日、恒例の定期戦を桐蔭のグラウンドで行い、炎天下で真剣勝負。140周年を迎える記念の年に奮っていた。

あたり、和・桐蔭同窓会の森下正紀会長が始球式の森下を務めた。

両校は旧制中学を前身に夏の全国高校野球大会には第1回から出場しており、親交を深めることを目的に毎年8月に定期戦を実施。これまでの2年は桐蔭が勝利した。

この日は2試合を行い、第1試合で桐蔭は市岡のエースの前に内野ゴロの山を築くなど、最後まで思うような攻撃ができず、1対4で敗れた。第2試合も12対4で市岡が勝利した。

試合を振り返り、桐蔭の向井周主将は「打線がつかないのが課題。市岡さんは声がよく出ていて攻守交代時のタッチも上手かった。市岡高校の森田周太郎主将は「ここは絶対に勝たなかった。走塁ミスが多かった。秋の大会までに修正したい」とそれぞれ戦力アップを誓っていた。



森下同窓会長による始球式